

シニア サポーター

外国からの留学生を自宅に受け入れるホストファミリーに興味があります。新型コロナウイルス禍を経て、好きだった海外旅行からも足が遠のいてしまいましたが、自宅で異文化交流ができる、聞きましたが、受け入れ方法や気をつけることを教えてください。

「マリさん、起きてる？」東京都大田区の草山英明さん(77)宅ではラトビア出身の高校生、マリさん(18)が4カ月ほど暮らし、高校に遅れないよう早起しにいくのは草山さんの朝一番の仕事だ。休日はジムで一緒に汗を流し、小旅行を楽しむ。

草山さんは高校生の交換留学を手掛けるAFS日本協会(東京・港)を通じてこれまで20人ほどの留学生を受け入れてきた。帰国後に家族を連れて再訪する留学生も多く、草山さんが外国に留学生を訪れることもある。「留学生からは学びが多く、世界が広がる」と話す。

長野県諏訪市の藤森隆子

外国人留学生と楽しく交流

留学生の受け入れ団体と特徴

AFS、YFU、EILなど	高校生を1週間から10カ月の期間で受け入れ。ホストファミリーと留学生の仲介役がサポート
各自治体の国際交流団体	姉妹都市などから来日する外国人を受け入れ
ホームステイインジャパン	ホストファミリーと留学生のマッチングサービス。1日2000円ほどの謝礼を支給

シニアと留学生の生活 (ホストファミリーなどへの取材から)

- 毎日の食事を一緒に
- 互いの母語を教え合う
- 共通の趣味を楽しむ
- 旅行に行く

シニア

- 若い人との関わりが刺激に
- 世界を知ることができる
- 世界中に「家族」ができる

双方にメリット

留学生

- 日本の伝統文化などを教えてもらえる
- 日本語の上達につながる

短期の受け入れプログラムも

藤森さんは「家に若い留学生がいると新しい情報が入り、生活が新鮮になる。食習慣の違いなどもわかって面白かった」と振り返る。東京都港区の栗山幸平さん(62)は日本国際生活体験協会(EIL、東京・文京)を通じて6月までの10カ月間、ドイツの留学生を受け入れていた。来日当初はホームシックのような時期もあったが、今では週に1回ほど皇居の外周を走る「皇居ラン」で汗を流す仲間にも出場した。



公園で散歩を楽しむ草山さん夫妻と留学生 (東京都大田区)

シニア層のホストファミリーは少なくない。23年度、AFSを通じてホストファミリーを務めた家庭のうち、60歳以上が世帯主の家庭は93軒あり、全体の15%ほどだった。

■食事には苦労も

ホストファミリーになるには、留学団体や自治体の国際交流団体などに登録する必要がある。外国人の年齢や受け入れ期間はプログラムによって様々。団体によって少額の補助が支給されることもあるが、あくまでボランティアであるため多くの場合謝礼はない。

AFS評議員の形山鮎子さんは「食事の用意で無理をする必要はない。留学生に自分でつくってもらうのも選択肢」と呼びかける。自治体主催のプログラムでは泊からの受け入れも少なくない。埼玉県国際交流協会(さいたま市)は県内大学の留学生などが一般家庭に2、3日滞在する事業を主催する。同県の松本敏子さん(69)は仕事が終わる子どもが独立してから受け入れている。「負担が小さく気軽に交流できる」と話す。

東京都武蔵野市の保田耕作さん(74)は23年12月、インドネシアの大学生と明治神宮外苑を散策した。保田さんが参加するのは武蔵野市国際交流協会(東京都武蔵野市)の「ホームビジット」。地域住民と近隣の大学に通う留学生を協会がマッチング。月に1度を目安にそれぞれが交流する。自宅への受け入れはなく、自分の都合に合わせて留学生と話せるため自由度が高い。保田さんは「世界中に友達ができ、楽しい。留学生の相談に乗ることもあり、日本の父親のつもりで接している」と話す。(丹田拓志)